

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第 卷四十第

行發日一月三年一十正大

## 論叢

最低生活費課稅説を駁す

法學博士 小川郷太郎

マルクス氏餘剩價值説の評論

法學博士 田島錦治

戰國の都市

文學博士 三浦周行

小作制と小作法

法學博士 河田嗣郎

我國に於ける國民所得の發達

法學士 汐見三郎

經濟道と經濟術

法學士 作田莊一

## 時論

我邦の相續税を論ず

法學博士 神戸正雄

## 說苑

地學觀社會學説に就きて

法學博士 財部靜治

リッケルトの價值體系

文學博士 米田庄太郎

## 雜錄

エルンスト、フ  
リードリッヒの  
經濟階段説

經濟學士 黒正巖

## マルクス氏餘剩價值説の評論（二）

田　島　錦　治

### 第五節

不變資本と變易資本との區別、餘剩價值の成立、此等の説に對する批評

マルクス氏の最も著名なる著書は資本論の名を冠す。故にマルクス主義の眞髓を知らむと欲せば、先づ氏の資本に對する觀念を闡明するを要す。氏は資本を以て歴史的範疇に屬すと思考するは必ずしも誤れりと爲さずと雖も、商品の循環を以て資本の起源と爲し、及び貨幣を以て其の出現する最始の形式と爲すの謬れるは、余既に之を説明したり。蓋し人類の最も原始なる状態に於ては赤裸々にして、何等の器具をも有せず、赤手を以て天然物を捕獲採集して之を食用に供したる如き時代ありたることを想像し得へし。然れども石器時代に至りては、人類は既に生産用具即ち資本を所有したるものと謂ふへし。故に此時代の石鏃石斧も、現代文明國民の所有する複雑精巧なる機械も、精粗の差はあれども、資本の範疇に屬するは即ち一なり。マルクスが勞働を親らせざる資本主か所有する資本、即ち氏の語に従へば他人を働かせて自己を利する方便となるべき

物を指して資本と爲すは、實に氏の獨斷偏執なりとなす。

又氏は其獨斷偏執に基づき、資本を分類して、不變資本 (konstantes Kapital) と變易資本 (variables Kapital) と爲し、通常經濟學者が採れる固定及び流動資本の分類に似て非なる説を立て、更に大なる誤謬に陥るべし。

經濟學者の通説に従へば、固定資本 (fixed capital) とは例へば (1) 機械器具、(2) 工場及び其他一切の生産設備等の如く、繼續して幾回も生産に使用せられ、毎回の生産手續に由りて其價值の一部分を喪失すと思考せられ得る所のものなり。流動資本 (circulating capital) とは、例へば (3) 生産用の粗生原料、(4) 勞働者の生活資料、即ち勞賃として企業主より支拂はるべきもの等の如く、只一回の生産に使用せられて其價值の全部を喪失するものなり。而して資本の全體即ち固定並に流動資本は、生産力 (productivity) を有す。詳言すれば生産手續に於て喪失したる資本の價值は生産物の價值となりて再生し、而かも此再生したる價值は喪失したるもの (depreciation, Amortization) より大なり。資本カスの如き生産力——マルクスの慣用語を假れば——餘剩價值を生む力を有する事は日常萬般の事實が證明する所にして、未開野蠻の石器時代より現代の複雑精巧なる機械的工業時代に至るまで幾萬年間吾人々類の經驗し來りたる所なり。

然るにマルクス氏は自己の創意を以て、資本を不變及び變易資本の二に分ち、前掲(1)機械器具、

(2)工場及び設備、(3)粗生原料の三を以て不變資本と爲し、即ち生産手續に由りて喪失したる價值と同額の價值を産物に再生せしめ得るに止まると資本と爲し、(4)労働者の生活資料(即ちマルクスの語に従へば、之を以て資本主が購買したる労働力)を以て變易資本と爲し、即ち生産手續に由りて喪失したる價值より著しく大なる價值を生産物に再生せしめ得る所の資本なりと爲したり。

(資本論一卷六章)

故にマルクスに従へば、資本主が生産に使用したる原料、例へば綿花、油、脂肪、染料、石炭等の全價值は生産物の價值の中に再生し、機械、器具、工場其他設備の價值の一部、即ち生産手續に由りて消耗したる部分は同じく生産物の價值の中に再現するに止まり、それ以上に何等の餘剩價值を生ずること無しと謂ふなり。即ちマルクスは前掲資本の減價償却(Amortization)あることを認むれども、其利子(Kapitalzins)を生ずることを否認するなり。マルクスの説の多くはペチチオ・プリンチペイ(匿證伴争)なるか、之も亦其一例なり。且甚しき不條理の説なり。佛國帝政時代の末期に於て雄辯家として聞えたる同國社會主義者ブリオーヌ(Brisson)は一層甚しき過激説を唱へ、『家屋所有者は賃賃料を受くるは不當なり、宜しく彼は借家人に之を支拂ふべきものなり、何となれば家屋は借家人の居住に由りて維持保存せらるればなり』と。(ルロワポリュー氏集産主義論二四九頁及二七五頁)。若し果して此説の如くならば、何人も進みて賃賃家屋を供給せ

さるべきは明かなり。マルクスは減價償却即ち純粹の損料を認めたる丈は、ブリオースの説よりは優れり。然れども尙謬れり。マルクスの説の如くならば、機械の所有者は其借用人より唯純粹の損料を受くるのみとなるべく、從て機械の供給は杜絶すへし。抑も機械は之を使用する勞働者の生産力を増加するものにして、其製作利用せらるゝ所以は茲に在り。ルロワ・ポリーユ氏か屢々繰返せるロビンソンの平易なる設例はマルクスの誤見を打破して餘蘊なし。氏は曰く「ロビンソンは辛苦して一輛の車を作りたり。彼は其ために直接なる報酬を毫も受くることなくして三四十日を費やしたり。斯くして彼は或は暇を潰し、或は目前の消費（即ち若し彼が車を作らざりしならば目前に多く享受し得べき筈のもの）を控へたり、扱車か出來上り、彼の向後の勞働は平易となり且一層生産的となる。而るに彼の住する孤島に幾人かの英人及び西班牙人が到着す。彼等はロビンソンに請ひ、彼の車を彼等か良好なる状態に保存し、若し破損せば之を修理すへきか故に、彼等に貸すへきを求む。ロビンソンは答へて曰く、夫たけにては不充份なり、汝等は素手を以て爲し得る仕事よりは二倍の仕事を同一の時間に此車を使用するに依りて爲し遂げ得へし。汝等の勞働の此生産力増加は余の車に屬す、即ち此を作りたる余に屬す、故に余は汝等と同じく其分配に與るべきなり。余の車か汝等の勞働に附加へたる此生産増加を分配せよ。余に此増加の半分又は三分二を與へよ、それにては汝等は尙ほ利益を得るなり。若し此分配を爲すを否まば、汝等自

ら一の車を作れど。此言たるや誰かロビンソンを以て無理取を敢てすと爲す者あらむや。若し彼か寛仁又は慈惠を行ふ意あらは、無償にて其車を貸すへきは疑を容れず。然れとも一般社會關係の立脚地を成す所の正義の上に立つときは、彼は其車を借用する人々より前述の如き生産増加の一部を要求すへき權利を有つことは争ふ可からず。借用せる此車にて補助されたる人の勞働の生産物は其人單獨の生産物に非ずして、彼と車の製作者及び貸主たるロビンソンとの共同生産物なり。尙一層複雑なる無數の形式に於て、總ての機械、總ての設備、總ての資本は此車の場合に於けると同じ。機械を作りたる人、又は之を買ひて之を作りたる人の權利を繼承したる人は、マルクスの慣用語を假れば、此機械より其使用價值を引出す權利を有すへし。其使用價值とは勞働者の勞働の生産力を増加し、其結果として利子又は利潤と稱する利益を生むものなり。今此機械は無生物に非ずして、自身獨立し、自己の爲に他と契約するを得る生活體なりと假定せば、機械が勞働者の勞働に附加へたる生産増加の一部を機械に與ふることを何人も必ず拒まざるべきなり。今前例に掲げたる車を生活體と假定せば、それを借用したる人に對して彼は言はん、「余の任意なる協方に依り（何となれば余を作れるは汝に非ざる故に）汝は單獨にて十二時間を要すへき勞働を六時間にて成し遂げ得たり、故に汝は余の爲に六時間の利益を得たり、汝か余の力に依りてのみ得たる此餘剩を分配せよ、余に其半分又は三分二を與へよ、即ち余の勞に對して三時間又は四時

間の勞働に相當する所の生産物を余に與へよ、而も汝は尙ほ利益を餘し得へし」と。此生ける車の要求は正義に適へり。此車を作りたる人、又は之を買ひて所有する人は、今述へたる如く生活物にして智慮ありと假定せる場合に於ける車自身と同一の立場に在るは毫も疑を容れず、と。(集産主義論二七六及び二七七頁)。

此ルロワ・ポーリユー氏の比喩的駁論は余輩より見れば稍冗漫の嫌あれども、マルクスが常に理論の根據を示さずして、謂ゆる匿證伴争の非論理的僻論を縷述するに對する好箇の對照なりとす。マルクスが機械及び生産設備の生産力に盲目なるや、石器時代の蠻人よりも甚しく、孤島漂着のロビンソンに劣れるに至りては抱腹絶倒の外無きなり。抑も文明國民が絶えず精巧なる機械を作るに焦慮し、生産設備を完成するに苦心する所以は、他なし、此等資本が勞働の生産力を著るしく増加するを確知するか爲なり。若し果してマルクスの説の如く此等資本は只減價償却を爲し得るのみならば、誰か復之か改良に留意するものあらむや。否啻に改良に留意せざるのみならず、之か新なる製作をも見合はずに至るへきなり。

吾人の謂ゆる固定資本に屬する機械及び生産設備が生産力を有するは、毫も疑を容れずと雖も謂ゆる流動資本の一部たる原料に關しては、其生産力は前者の如く明白ならず。然れども固定資本は總て原料より成り、又原料あるに依りて其資本たる任務を行ふものなるを知るときは、原料

も亦生産力を有すへきは推測するに難からず。況んや資本を具體的各別的に考察せずして、之を價值に抽象化して一般的に考察するに於てをや。且夫れ原料は生産方便として用ひらるゝ場合は即ち資本なれども、原料の中には享受方便として労働者の衣食住の用途に供せらるへきもの少からず。マルクスの謂ゆる變易資本の或物は、之を原料として生産用に充つるときは、即ち其謂ゆる不變資本となる。例へば石炭は工場にて蒸氣汽罐を熱するに用ひらるゝときは、マルクスの謂ゆる不變資本にして、何等餘剩價值を生せされども、勞賃の一部を以て職工か買ひたる石炭は其家庭に於て暖房又は庖厨用に供すれば、即ち労働力を維持する所の變易資本となりて餘剩價值を生すとの結論に到達すへし。之と同一の理由により、紡績場に於ける綿花は不變資本なれども、職工の冬服又は夜具に入れる綿は變易資本となる。酒の原料としての米は不變資本なれども、職工の食料とする米は變易資本となる。澱粉工場に於ける馬鈴薯はマルクスに従へば何等餘剩價值を生せされども、職工の家庭に於て食用とする馬鈴薯は職工の労働力を引起すものにして、即ち餘剩價值を生すとの奇妙なる論結に到達すへきなり。

マルクスは其謂ゆる變易資本か、如何にして餘剩價值を生むかを説明すること、大約次の如し。資本主は労働市場に於て、商品たる労働を其交易價值にて買ひたり。労働の交易價值は労働者并に其家族の生活を維持する費用、即ち彼等の最低生活資料の價值なり。此價值の一日分を六時間労働とすれば、労働者一日の勞賃は即ち六時間労働なり。資本主は此六時間労働なる價值を以



て買ひたる勞働を自由に處分するを得へし、換言すれば彼は此勞働の使用價值を享受す。今若し彼が此使用價值を享受すること、換言すれば勞働力を發揮せしむること一日六時間に止まるべきは、彼は何等の餘剩價值を利得せず。何となれば勞働力の生産物の價值は恰も其原價と同一なればなり。然るに資本主は勞働力を十時間、十二時間、又は十四時間使用するに由りて、四時間、六時間、又は八時間の餘剩價值を利得す。而して斯かる場合に勞働者は四、六、又は八時間の無償勞働を爲すものなりと。

マルクスは前述の如く平均六時間の無償勞働が資本主の利潤を生むものと論し、而して勞働者か何故に其受くる所の生活費の價值に二倍する犠牲を拂ふに同意するかの説明は、氏の緘口して語らざる所なり。氏は勞働力の交易價值、即ち勞賃を以て、勞働者并に其家族の生活費に均しとの假定を固執するか故に、分業の發達、機械、工場其他生産設備の改良、發明發見の利用等凡そ勞働者の生産力を増大する所のものより生ずる利益は、毫も勞働者に歸せずして資本主にのみ歸すと妄斷す。特に知らずや、斯の如き改良進歩は、啻に企業者（マルクスは之を資本主と混同す）及び資本主のみならず、勞働者をも利益することを。又知らずや、是れ啻に生産者階級のみならず、更に大に消費者階級を一般に利益することを。此點に就て余が曩に本誌に連掲したる二論文「勞賃の經濟的及び道德的性質」及び「利潤の經濟的及び道德的性質」に詳論したる所なるを以て、今亦茲に贅説せず。但マルクスの餘剩價值説は、晩近社會主義即ち集産主義全體の心核を成すものなるか故に尙ほ分析批評するの要あり。